

# 道は無窮なり

## 悟りてもなお行道すべし

「仏道修行にはこれでよいという限界はない。

悟っても、その上になお修行しなければならない」と、道元禅師はおっしゃっておられる。

我々の日常生活の中にも、日誌を書きつづけて七十年、家計簿を綿密に記録される方もいらっしゃる。

普通は三日坊主か、断続的に思い出し、行動に移ることが多い。

馬拉ソランナーが一生懸命に精進し練習してひた走り、やがて好タイムが出た。

「もう私は到達点に達した」と、たかをくくり、酔いしれてあたり精進を怠るようになったとしたら、せつかくの鍛練も生かされず、ずるずると後退してしまつてあらう。

『学道用心集』に、「参学の人、しばらく半途にして始めて得てん、全途にして辞することなかれ」と。

「我々は精進の効果によつて道程の半ばで悟りの境地に達した。

悟っても悟りにとどまらず、更に修行しなさい」と、道元禅師は説いている。

半途にして悟った。

けれども、一步足らない思いと、もう一步、もう一步と修行する姿が大切である。

悟りに安心し、それにとらわれて安住しないほしい。

「全途にして辞することなかれ」と発心して行ずる時、それは無限の精進であり、そこに新たな人生の有意義な生活が樹立される。

念願に向かって回転がスムーズにいった時、心情は一時安堵する。だが、壁にぶつかって心乱れる。

更に試行錯誤しながら努力し、目的に向かって進む。

「ああだ こうだ だめだった」と乱心の中にも平常心をもって「日々の行い」を一つ一つ大切にして行動する時、人生の意義は大なるものがあります。

精進は無限なり。

「正法眼蔵隋聞記」は、道元禅師が洛南聖興寺に道場を開いたとき、その学風を慕って参じた懐装（二祖孤雲懐装大和尚）により、日々折りに触れて説かれる師の教えを記録されたものです。そこには、平易な言葉によって、しかも実際の生活に即しながら、学道するものはいかにあるべきか、修行はどのようにするべきかが丁寧に記されています。ここに、若き道元禅師の強烈な情熱と意志とを、生の人間の姿として感じ取ることが可能です。

また、「学道用心集」は、道元禅師により、修行者のために書き示された心得で、仏法を修する者の心構えを親切かつ流麗なる漢文で説かれています。

道は無窮なり

悟りても

なお行道すべし

道元禅師

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部